

詩「小岩井農場」の「自由射手(フライシュツツ)」とウェーバーの歌劇《魔弾の射手》

—宮沢賢治の「魔界」イメージをめぐる—

お茶の水女子大学大学院生

黄 毓 倫

「一九二二、五、二一」の日付をもつ詩「小岩井農場」¹パート七には、「射手」についての描写がある。

……／この人はわたくしとはなすのを／なにか大へんはばかりてゐる／それはふたつのくるまのよ
こ／はたけのをはりの天末線^{スカイライン}／ぐらぐらの空のこつち側を／すこし猫背^{ねこぜ}でせいの高い／くろい外套
の男が／雨雲に銃を構へて立つてゐる／あの男がどこか気がへんで／急に鉄砲をこつちへ向けるの
か／あるいは Miss Robin たちのことか／それとも両方いつしよなのか／……／少しばかり青いつめ
くさの交つた／かれくさと雨の雫との上に／菩薩樹^{きだ}皮の厚いけらをかぶつて／さつきの娘たちがね
むつてゐる／爺^{おや}さんはもう向ふへ行き／射手は肩を怒らして銃を構へる／……／火は雨でかへつて
燃える／自由射手^{フライシュツツ}は銀のそら／ぼとしぎどもは鳴らす鳴らす／すつかりぬれた 寒い がたがたす
る (下線筆者)

「小岩井農場」パート七の前のパート五とパート六は省略されているが、残された下書稿には屈折した人間関係が描かれており、また上に引用したパート七では、「幼い二人の農婦（ミス・ロビン、すなわち美しいコマドリに例えられる）と、その親らしい農夫に対する「わたくし」の屈折した意識」²が記されており、そこに現れる「雨雲に銃を構へて立つてゐる」「すこし猫背でせいの高い／くろい外套の男」は、屈折した感情にとらえられた「わたくし」（思考主体である賢治）に、「急に鉄砲をこつちへ向ける」かもしれない、という畏怖の念を抱かせる存在である。この「射手」には、しばしば賢治の書簡に登場する、仏教における「魔王波旬」のイメージが認められる³。というのは、「煩惱にとらわれた低次の精神の現われ」⁴である「修羅」の状態は「魔界」と結び付き、「右手に箭をもち左手に弓を握」⁵り、「欲望を射る《射手》」⁶である「魔王波旬」は、まさに修羅の意識（屈折した感情）にとらえられた賢治を誘惑しようとする、恐るべき魔界の存在なのである。

一方、詩中の「射手」が発射するのは箭ではなく「鉄砲」の弾丸であること、またパート七の最後にある、「くろい外套の男」のイメージと重なり合う「自由射手」^{フライシュツツ}という表現から、「小岩井農場」パート七の「射手」を、ドイツの作曲家ウェーバー（Carl Maria von Weber, 1786－1826）の歌劇《魔弾の射手（Der Freischütz）》を念頭に作られた人物とする指摘がある⁷。本稿では、当時の日本における《魔弾の射手》の受容状況から賢治と《魔弾の射手》との接点を探り、《魔弾の射手》の内容と関連付けて賢治の「魔界」をめぐる認識の分析を試み、「小岩井農場」パート七の「射手」と歌劇《魔弾の射手》との関わりを明らかにしたい。

¹ 作品の引用は、すべてちくま文庫版全集による。

² 大塚常樹『宮沢賢治 心象の記号論』（朝文社、1999 年、頁 152－153）

³ 同注 2、頁 153。

⁴ 同注 2、頁 30。

⁵ 同注 2、頁 31－32。

⁶ 同注 2、頁 31。

⁷ 『日本近代文学大系 第 36 巻 高村光太郎・宮沢賢治集』（角川書店、昭和 46（1971）年）頁 306 の恩田逸夫による注釈一。